

# 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績，業績

——第6報 松岡の留学と教室の公開，診療および研究——

廣谷 速人

京都市

受付：平成22年7月28日／受理：平成23年1月7日

**要旨：**松岡道治外科学助教授は，畸形矯正学研究のため明治35（1902）年に欧米へ留学，同39（1906）年に帰朝，同年6月に整形外科学教室を開設した。教室は，明治40（1907）年，明治44（1911）年に市中開業医，一般市民に公開され，注目された。教室の整形外科関係の計器具，機器は松岡によってよく整備され，とくにそのエックス線装置は，明治44（1911）年来訪したドイツのレントゲン科専門医によって賞賛され，専門雑誌へ紹介された。教室実績，とくに先天性股関節脱臼，脊椎カリエスの症例数，研究は，ともに当時他の追隨を許さなかった。

**キーワード：**整形外科史，松岡道治，留学，先天性股関節脱臼，脊椎カリエス

## 第1章 はじめに

京都帝国大学医科大学整形外科学教室の創設事情，その直後の状況についてはすでに報告した<sup>1)</sup>ところであるが，本報告では松岡の留学事情と，松岡教授時代の教室の公開，評価，実績について記述する。

## 第2章 松岡道治の留学

松岡は京都医科大学外科学助教授着任約1年後，明治35（1902）年8月1日に「矯正外科学研究ノ為メ満3ヶ年間独国へ留学ヲ命」ぜられ，明治39（1906）年5月13日に帰国した<sup>2,3)</sup>。通算3年9カ月と予定を上回った留学期間であった。

しかし，松岡自身による留学に関しての纏まった記録は，渉猟し得た限り見出し得なかった。そこで，留学中の発表論文を調べ，さらに帰国後の講話や論文などに現れている断片的な記述を发表暦年順に挙げて，松岡の留学内容を明らかにしたい。

まず松岡の留学中の論文として，ブレスラウ大

学<sup>4)</sup>，ゲッチンゲン大学<sup>5)</sup>，ヴェルツブルグ大学<sup>6)</sup>の，それぞれ病理学教室から論文発表があることから，留学中に整形外科の臨床研修だけでなく，これらの大学の病理学教室で基礎的研究も行ない，それぞれ一定の業績を挙げたことが分かる。

松岡自身が留学について最初に述べたのは，整形外科学教室発足直後とも言うべき明治39（1906）年6月24日の京都医科大学整形外科開設に際しての新聞インタビュー記事<sup>7)</sup>である。それによれば，整形外科はアメリカがもっとも盛んであるとし，昨年<sup>8)</sup>訪問した病院に器械工場や身体障害児に対する学校があることを紹介している。当時のアメリカでこれらの設備を持ち，もっとも有名であったのはニューヨーク市のHospital for Ruptured and Crippled（現・Hospital for Special Surgery<sup>9)</sup>）であったと考えられるので，松岡は帰路アメリカへ立ち寄り，ニューヨーク市でこの病院を訪問したであろうと推察できる。

明治40（1907）年4月の第8回日本外科学会総会の演題の中で，「ブレスラウノミクリッツ<sup>10)</sup>ノ下ニ在リテ百以上ノ胃ニ就テ研究シタリ」と述べ

ていて<sup>11)</sup>、その成果は上述のようにドイツ語論文<sup>4①)</sup>として発表されている。

つぎに明治40(1907)年夏の『叡山講演集』に収録されている講演「人体を透視する方法」<sup>12)</sup>のなかで、ベルリン大学において「ラヂウム」の家兎の目に及ぼす影響を実験したことを述べ<sup>13)</sup>、また同書収録講演「吾人は天然の賜物を如何に應用すべきや」<sup>14)</sup>のなかで「私が丁度昨年<sup>15)</sup>紐育へ行って居る時に」云々とあり、さらに「独逸チューリンゲン地方<sup>16)</sup>に居て見ました」とも述べている。

また明治41(1908)年1月発行の論文<sup>17)</sup>では、「余ハ在欧殆ンド四年に垂ヤントシ、其期間独、塊、伊、瑞、仏、英ニ遊ビ、尚ホ旅程ヲ進メテ、米ノ諸大学ヲ遊歴シ」と記した上で、病院、医学校における理学療法科の必要性を力説し、ツェンデル<sup>18)</sup>の器具について詳述している。

次いで明治43(1910)年発行の『骨及び関節ノ結核』の中で、「ヴェルツブルヒ医科大学病理教室」における動物実験<sup>6②)</sup>やブレーメル<sup>19)</sup>の病院を訪問したこと<sup>20)</sup>に触れている。

その後昭和61(1986)年になって、内藤一男松岡病院元院長が語ったところによれば、大正15(1926)年発行の『松岡矯正科及外科病院医報』に「プレスラウ大学ミクリッツ<sup>10)</sup>外科教室で研究、去ってウイーン大学にてローレンツ<sup>21)</sup>に師事すること年余益すること頗る多かりき。再びドイツに帰り、ベルリン大学矯正学教室にホッファー<sup>22)</sup>を訪い居ること年余、辞して仏、英、米各大学を歴訪し、前後五年を費やし」と書かれていたと言う<sup>2)</sup>。

さらに、昭和29(1954)に、松岡前院長の遺志により内藤一男院長によって教室へ寄贈された蔵書<sup>2)</sup>の中に、ダルムシュタット(ドイツ・ヘッセン州南部)のHermann Lossen<sup>23)</sup>の署名入りの一書<sup>24)</sup>がある。このことから松岡は、少なくとも本書出版の1905年頃(帰国1年前)、同地を訪れていたことが分かる。

以上をまとめれば、松岡の留学は始めの予定であった3年を越え、ドイツ、オーストリアの著名な整形外科学教室に滞在し、Lorenz<sup>21)</sup>、Hoffa<sup>22)</sup>ら当時両国を代表する整形外科学教授の下で臨床を研究するだけでなく、いくつかの大学の病理学教

室で基礎的研究にも従事して論文を公にし、加えて帰路欧州各国やアメリカの大学や病院を訪問して見聞を広めたと言える<sup>24a)</sup>。

なお拙稿第二報<sup>25)</sup>で述べたように、留学中の明治33(1900)年7月に医学博士の称号を授与されている。

### 第3章 松岡教授時代の教室

#### 第1節 教室の公開

##### 1. 京都医学会第4回総会

京都医科大学整形外科学教室が外部に初めて公開されたのは、教室開設後1年を経た明治40(1907)年5月に開催された京都医学会第4回総会に際して附属病院参観が行なわれた時である<sup>26)</sup>。

そのとき教室は、さまざまな整形外科診断治療機器<sup>27)</sup>、各種脊椎・股関節矯正器や股関節・下肢展伸装置<sup>28)</sup>、さらにはエックス線写真(脊椎カリエス、整復前後の先天性股関節脱臼、くる病、骨肉腫など)などを多数展示し、その説明には山崎氏<sup>29)</sup>が当たったと記録されている。

これらの整形外科用の医療器械や整形外科疾患の標本やエックス線写真は、来場した市中開業医に整形外科という専門領域についての認識を高めるに役立ったに違いない。

たとえば『京都医事衛生誌』は、「松岡大将の号令一下、「右や左のお旦那様方」とでも云ひさうな畸形隊の観兵式、凄じいものだ。今や這般新学科の広告時代なるに、此勢なら以往万以上の報告は河童の尻、整形外科の前途実に多望なりだ」とその評判記を掲載した<sup>30)</sup>。さらにこれに少し遅れて同誌に出た同誌の参観記「漫談」<sup>31)</sup>によれば、「まず本門を入りて、左の整形外科が売店然として」と整形外科学教室の存在<sup>32)</sup>が描写されていて、とりわけ注目されたものと考えられる。

##### 2. 京都帝国大学創立記念日

つぎに公開されたのは、京都帝国大学が明治44(1911)年から4月1日をもその創立記念日とし、各分科大学を一般市民に「縦覧」せしめたときである。医科大学では午前整形外科教室、午後法医学教室が選ばれて開放された<sup>33)</sup>。

このとき整形外科教室では，義手足その他の製作工場，電気療法室，X光線室<sup>34)</sup>(図1)(林学士<sup>35)</sup>による実験〔撮影操作実技のデモンストレーションと思われる〕，関節運動練習機，脊柱彎曲測定及治療器械<sup>36)</sup>，頭蓋骨に穴を鑿つ電気モートル<sup>37)</sup>，ローレンツ氏の“骨を折る器械”<sup>38)</sup>(図2)，関節内へ酸素を注入する装置<sup>39)</sup>などを供覧した。

なお明治44年発行の松岡の論文<sup>40)</sup>には，股関節結核の股関節屈曲拘縮矯正用の「グリーンフェルド松岡股関節展伸矯正台」<sup>41)</sup>が図示されている。

## 第2節 松岡教授の講義と教室の評価

### 1. 松岡教授の講義

松岡教授の講義について瀬木嘉一<sup>34④)</sup>は，帰朝早々，整形外科の講義をよそに，ドイツ語で電気学から講義を始め，学生は難解で互いに腕をつき合ったこと，電気的原理などを図にして，女中が持参した昼弁当の包みを解く時間を惜しんで講義の準備をしていたことなどを伝え聞いていると，のちにその著書で述べている<sup>34⑤)</sup>。

松岡教授が学生への講義を”Meine Herren!”と始め，終始ドイツ語で行ったことは今日まで京大

同門の間で語り継がれているところである<sup>42)</sup>。

### 2. 松岡教授の評判

松岡教授についての評判が医学雑誌に初めて掲載されたのは，明治42(1909)1月の医科東西番付<sup>43)</sup>である(図3)。

この番付では，東京帝国大学や軍医を中心とする東方に対して，西方に京都帝国大学京都医科大学，同福岡医科大学が配されていて，整形外科は東の田代義徳教授の「鍊塀山」とともに西の松岡教授の「松の岡」が前頭6枚目に名を連ねている<sup>44)</sup>。帝国大学の卒業年次は田代の明治21(1888)年と松岡の明治31(1897)年とでは10年の差があるが，東西両帝国大学整形外科学講座の教授として同格と見做したのであろう。

ついで明治42(1909)年12月に発行された『関西杏林名家集』<sup>45)</sup>によれば，松岡は東大外科の近藤教授<sup>46)</sup>とともに「東西の二壁を為し」，「其講堂に立つや真摯の口調を以て一言一句も苟もせず，淳々として説き会得せしめずんば已まず」「京大の一明星である」と賞賛されている。

松岡教授は大正3(1914)年1月に依願退官したが，その直前に2つ人物評が公にされている。

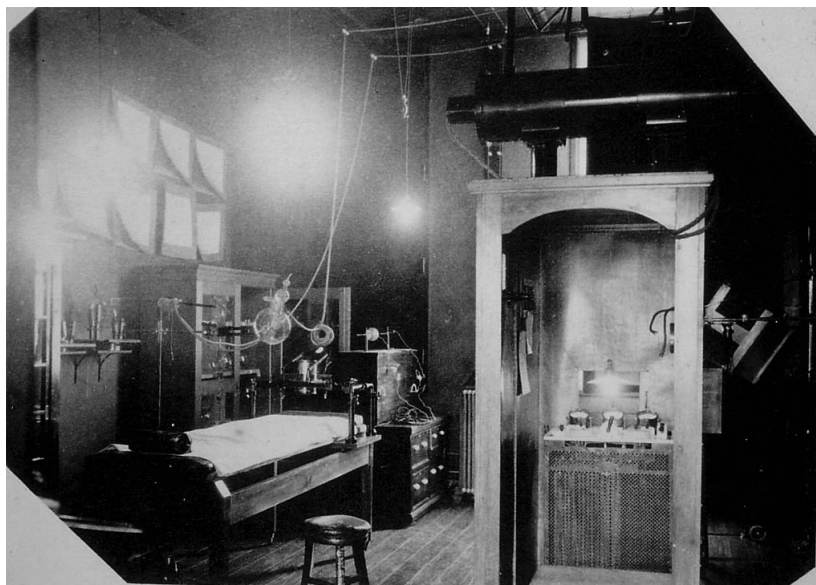


図1 整形外科X光線室<sup>34①)</sup>  
(京都大学大学文書館掲載許可済)

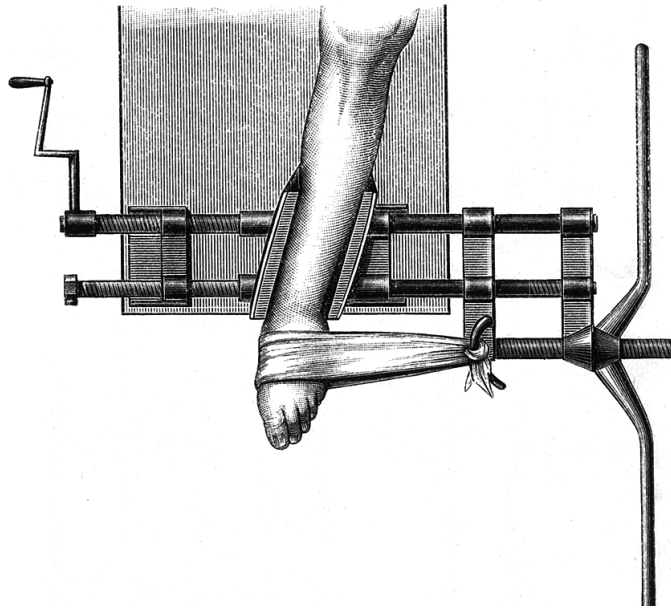


図2 Lorenzの碎骨器<sup>38⑧,⑦)</sup>

2枚のやや彎曲した垂直板（一方は可動）によって折骨部近位を万力状に固定した上で、固定部遠位と垂直板にほぼ直角にあるハンドルの間に牽引帯を巻き、ハンドルを回すと、そのてこ作用によって徐々に靭帯は断裂することなく伸展され、骨が折れて、骨切り術を行うことなく変形は矯正される。

そのひとつは前年3月に発表された『医海時報』<sup>47)</sup>に於ける東大田代教授との対比であり、いまひとつは前年10月発行の書籍<sup>48)</sup>の中での松岡についての記述である。

前者<sup>47)</sup>によれば、松岡は「爽身にして尖顎、苦虫を噛めつぶしたらんが如き顔貌を呈し」「全然満身の精力を以て今日の地位を買ひ得たるが如し」と描写され、さらに「孜々刻々として整形外科の業室に立てこもり、インクラインの瀕音を友としてギプスマふれとなりて余念なきところ、自己の天地はたゞこのところのみと思へるが如し」としている。さらにその教室は「儼然なる一大教室」であって、「之を欧州大学の業室に比して甚だ遜色あらず、一事既に学者としての斤量を推するに足る」とし、さらに「京都大学をして雄を関西に称せしむるの元素は、松君に負うところ少なからず」と賞賛している。しかし一方「十年一日の如く屹々として学究の生涯を改めざるも亦世人の敬服するところ」であるものの、「往々世間の情誼を無視して顧みず、冷酷無情なる細漢子なりと云うものあるが如きは君の為に又惜しむべき

所」と述べている。

後者<sup>48)</sup>には、その副題として「鐘鬼がニガ虫を噛み潰した様な面」が付いている。松岡教授は「天性学究的である。其の智に於て田代義徳に及ばず、其の技術に於ても東大の近藤<sup>46)</sup>には一籌を輸さねばならない。而して田代の円滑もなく近藤<sup>46)</sup>の如く余裕もない。年が年中鐘鬼がニガ虫を噛み潰した様な面をして日を送る人である」とし、「一生の間兀々として読書生を以て終はる可き運命の人」と評している。しかしこの著者は「京大整形外科に入り其の整頓したる様を一見すれば、何人も君が斯学の為にどれだけ努力を尽しつつあるかを知ることが出来る」とし、「唯学究一片の人として研究的資材堆裡に没頭して一代を経過すべき所謂専門の学術以外脳中何物をも止めずと云う一点に至っては京大中第一の人として推さねばならない」と述べている。

しかし松岡に将来についてのこの予想は当たっていない。

さらに本書は「然れども人は見掛けに依らぬ物で、時に臍ろなる祇園の夜桜に一宵千金の快を貪

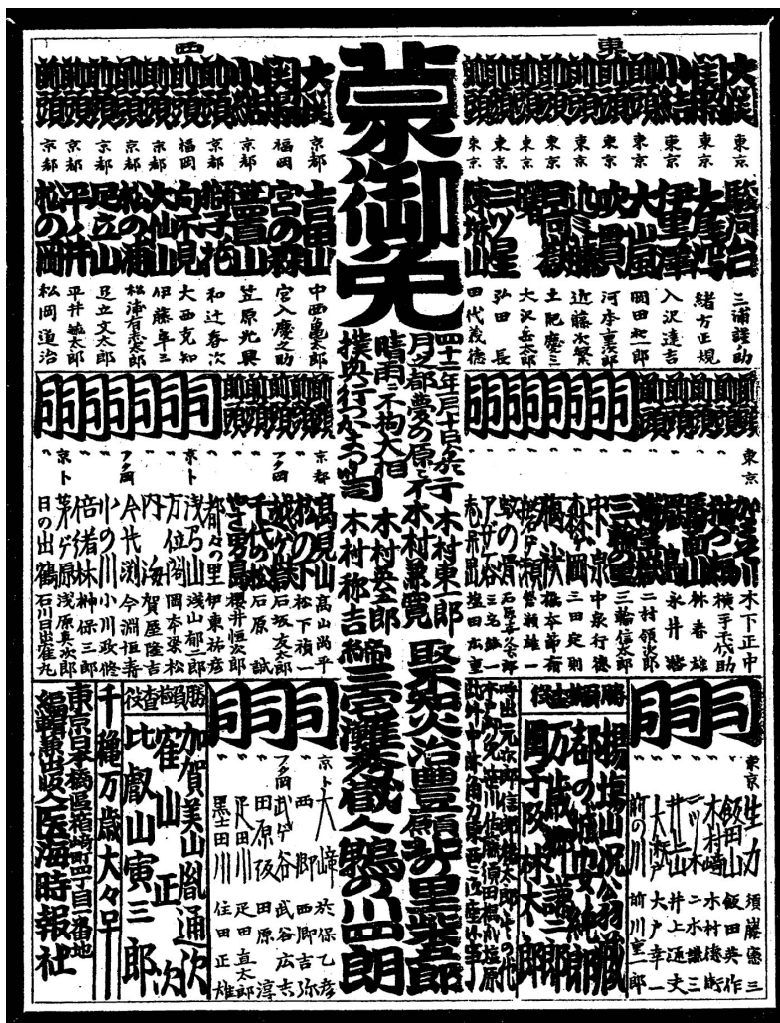


図3 医科東西番付<sup>43)</sup>

ぼることありと聞こえては、豈夫れ二度ビックリせざるを得んやである」と付け加え、松岡の知られざる一面を紹介している。

これらの評判や拙稿第二報<sup>49)</sup>で述べた日本外科学会での活躍を考えれば、松岡は京大在職中、整形外科学の確立，発展に教室，学会の内外を問わず、常に真剣に取り組んでいたことが分かる。

### 3. ドイツ人放射線科医の見た教室

明治44 (1911) にドイツの放射線科医師 Quiring<sup>50)</sup> がエックス線専門雑誌へ極東医事訪問記を発表した<sup>51)</sup>。それによれば、かれは (おそらく神戸から) 汽車で京都を訪れ、その後東京を経

て横浜のドイツ軍病院を訪ねたのち、上海へ向けて離日している。

京都については多くの字数を割いているが、主に京都医科大学を訪れて附属医院ならびに各科学研究室を見学したことを述べている。

その中で、とくに松岡教授の名前を挙げて整形外科の研究室に言及し、他の教室より優れた最新機器を整備していることを賞賛した。ことに専門家として、エックス線装置として Albers-Schönberg 式圧迫遮光板<sup>52)</sup>を備えた撮影台，トロコスコープ<sup>53)</sup>，Wehnelt 遮断機<sup>54)</sup>を持つ大きな発電機など、最新の装置が整備されていることを指摘し、賞賛している。

なお、一般に患者が清潔であること、診察が完全にドイツ式手順で行われていることなども記している。しかし教授に個人診療が認められず、教官の給料が安いだけでなく、志願（無給）助手<sup>55)</sup> (freiwillige Assistenten) が多数勤務していることを、驚きとともに述べている。

### 第3節 教室の実績

京都医科大学整形外科はその開設直後から多数の患者が来院していたことはすでに第1報<sup>1)</sup>で述べたところであるが、ここではその後の診療状況を研究面も含めて述べたい。

#### 1. 受診患者数の推移

明治40 (1907) 年4月 (整形外科開設11カ月目) の京都医学会総会での発表<sup>56)</sup> で松岡は、「千人以上ノ畸形患者ヲ治療セリ」と記し、現在の整形外科が取り扱うすべての疾患を挙げている。

次いで松岡は、明治43 (1910) 年9月発行の自著『人體畸形矯正学』<sup>57)</sup> に「一九〇九 (明治四二) 年ニ於テ已ニ六千ニ近キ畸形患者ヲ治療セリ」と記している。

その約半年後の明治43 (1911) 年4月 (教室創立後満4年) に開催された第11回日本外科学会総会 (第3回日本医学会) の宿題報告<sup>58)</sup> では、「七百人ノ脊椎「カリエス」ノ患者ヲ加療シテ畸形患者五千三百七十八名ニ対シ丁度約一三・〇一%ニ相当シマス」と述べた。

さらに大正3 (1914) 年の林喜作の報告<sup>59)</sup> では、教室創立以降大正2 (1913) 年9月まで (7年4カ月) の外来患者総数は1万2千人に達したと書かれている。

これらの数値を、京都医科大学より半年遅れて診療を開始した東京帝国大学医科大学整形外科学教室<sup>60)</sup> の満4年間 (明治39 [1906] 年10月から同43 [1910] 年10月まで) の患者数、4894人<sup>61)</sup> と比較すると、当時の東京、京都の両市の人口比<sup>62)</sup> を考慮すれば、当時の教室へ如何に多くの患者が訪れたかが理解できよう。

なお少なくとも松岡教授時代には、患者はすべて外科で一旦診察を受けたのち、その判断によ

って整形外科へ回されていて、患者が直接整形外科を受診することはなかったとされていて<sup>1,2)</sup>、そのような状況下でこれだけの実績を挙げ得たことは驚異であると言わざるを得ない。

#### 2. 受診患者の住所

これら整形外科来院患者の出身地を見るに、先ず第8回日本外科学会総会 (明治40 [1907] 年4月) での松岡のくる病の報告<sup>63,64)</sup> によると、その報告時、すなわち教室創立後10カ月間に受診した患者30名は、京都、滋賀、岡山、兵庫、鳥取の各府県のほか、九州地方からも来院したと記されている。

次に脊椎カリエス患者の出身地に関して言えば、上記第11回日本外科学会総会の宿題<sup>58)</sup> で報告された700例の住所は、京都 (35%)、兵庫 (13%)、大阪 (9%) の3府県で過半数を占め、以下滋賀、奈良、和歌山、三重、福井、岐阜の順であって、台湾からも1名来院していることから、その知名度は極めて高かったと判断出来る。

#### 3. 先天性股関節脱臼の臨床と研究

当時、先天性股関節脱臼と脊椎カリエスは、患者数が最も多く、またその診断、治療に難渋する整形外科疾患の代表であった。

先天性股関節脱臼は、明治32 (1899) 年4月開催の第1回日本外科学界総会で、小川三之助<sup>65)</sup> によって初めてその2例が報告された<sup>65,66)</sup>。その討論で松山為雄 (京都)<sup>66)</sup> は「我京都療病院に於いては1ヶ年 (?) に少なくとも五、六例はあるだらうと考へて居ります」と発言しているものの、小川<sup>65,66)</sup> が述べているように、当時は一般にまれな疾患であると認識されていた。本症が、8年後の明治40 (1907) 年4月に開催された第8回総会で田代<sup>67,68)</sup>、松岡<sup>69,70)</sup> が相次いで報告するまで、当時わが国唯一の外科系学会である日本外科学会総会に全く報告されていなかったことは、このことを裏付けるものである。

しかし明治39 (1906) 年12月の日本小児科学会京都地方会<sup>71,72)</sup> における来賓として、またその2カ月後の明治40 (1907) 年2月の京都医学会<sup>73)</sup>

において、松岡はそれぞれ「先天性股関節脱臼ニ就テ」と題する演題を発表し、40例の実験（自験）例のエックス線写真と患者4人の整復、固定操作を供覧した。松岡は上述の第8回日本外科学会総会（明治40〔1907〕年4月）には50症例を報告している<sup>69,70)</sup>ので、2~4月の間に10症例増加したことになる。

次いで明治41（1908）年11月に京都で開催された第13回日本小児科学会総会において、松岡は7歳の男児患者の脱臼整復の実技を会場で供覧し、「私ハ殆ド三年以来二百余ノ股関節脱臼患者を取扱マシタ」と発言している<sup>74)</sup>。

なお明治42（1909）年には本症101例をドイツの雑誌に発表したと言う記録が残っている<sup>75)</sup>。

さらに1913（大正2）年には、Hayashiら<sup>76)</sup>は、1906（明治39年）年6月（教室開講時）から1911（明治44年）年11月までの間に、230例を経験したと述べている。林はまた、その学位論文<sup>77)</sup>で同期間の先天股脱233例を研究対象にした。

これらの報告に加えて、拙稿第二報<sup>25)</sup>で述べたように、東大田代義徳教授は松岡に乞うて先天性股関節脱臼患者の病理標本のギブス模型を作製し、「我大学ノ学生ニ該模型ヲ示ストキハ松岡教授ニ感謝ノ意ヲ表スルノヲ例トイタシテ居ル」と発言している<sup>78)</sup>。

一方東京帝国大学医科大学整形外科学教室の状況を述べると、前述の第8回日本外科学会総会で田代教授が「予ハ昨年中十人ヲ見、内八人ハコレヲ治療シ、三人ハ治療ヲ終レリ」と述べ<sup>67)</sup>、また「東京大学外来ニハ六七七年間ニ該患者二四名アリ」と言う状況であった<sup>68)</sup>。

この第8回日本外科学会総会から3カ月後に開催された日本小児科学会東京地方会での田代の来賓講演では、3例の症例供覧に留まっていた<sup>79)①</sup>。

なお東大整形外科学教室Hiroamotoの報告<sup>61)</sup>によると、同教室診療開始<sup>60)</sup>の明治39（1906）年10月から明治43（1910）年同月までの満4カの外來患者総数4,804名中、先天性股関節脱臼患者は73名であったと言う。

このような東西両教室の学会報告や発言を総合し、さらに松岡自身専門書2書<sup>78)①,80)</sup>を上梓した

ことを考えると、当時の京大整形外科はわが国随一の症例数と実績を誇る先天性股関節脱臼研究の中心であったと言えよう。

#### 4. 脊椎カリエスの臨床と研究

脊椎カリエスについても松岡は、第8回<sup>81)</sup>、10回<sup>82)</sup>、第12回<sup>83)</sup>の日本外科学会に相次いで演題を提出し、また同学会誌に論文<sup>84,85)</sup>を発表した。

さらに前述したように、第11回日本外科学会では「脊椎「カリエス」」の演題の下に宿題報告を担当して<sup>58,86)</sup>、700例の症例に基づく疫学的・エックス線学的・病理学的研究を発表し、また明治41（1908）年には『骨及ビ関節ノ結核』<sup>6)②</sup>上梓して、とくにその保存的療法を詳述した。

これら骨関節結核の諸業績は、当時の日本外科学会に於いて、まさに一頭地を抜くものであったと言える。

### 第4章 むすび

松岡道治教授は助教授時代に欧州へ留学し、当時の独逸主要大学の病理学教室で実験的研究に従事してドイツ専門雑誌へ論文を発表するとともに、今なお現代整形外科学の祖と讃えられている大学教授の下で矯正外科学の真髓を学んで4年後に帰朝した。

明治39（1906）年に開設した京都帝国大学医科大学整形外科学教室に整備された各種標本、機器は、明治40（1907）年および明治44（1911）年に市内ならびに一般市民に公開され、参加者の注目を集めた。その標本、機器は欧州の大学に引けを取らないと言われ、明治41（1911）に来訪したドイツの放射線科医によって専門誌に紹介された。

当時の京大整形外科学教室は、残されている記録を参照する限り、特に先天性股関節脱臼や脊椎カリエスについては本邦最大の患者数を誇り、かつこれら整形外科主要疾患の研究面でも他の追従を許さない実績を挙げていたと言うことが出来る。

稿を終わるに当たり、資料を提供し御教示頂いた村地俊二愛知赤十字看護大学元学長、植家毅名古屋市立城西病院名誉院長、小林晶福岡整形外科

病院顧問, 坂口亮心身障害児総合医療療育センター顧問, 高取吉雄東京大学大学院医学系研究科関節機能再建学講座教授ならびに京都大学文学書館に深甚の謝意を表す。

## 注 (注記と引用文献)

- 1) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績, 業績. 第一報 京都大学整形外科学教室の創立. 日本医史学雑誌. 2005; 51(3): 385-406.
- 2) 内藤一男. 松岡道治先生の思い出. 京都大学整形外科学教室 開講80周年記念誌. 1986. p.6-15.
- 3) 松岡道治履歴書. 天児民和九州大学名誉教授へ送付された内藤一男博士(元・松岡病院長)の資料(私信. 小林晶博士, 平成15年11月14日)
- 4) プレスラウでの研究論文は1905(明治38)年発表の1編<sup>①</sup>だけである.
  - ① Matsuoka. Pathologische Anatomie des Carcinoma papillosum venetriculi Beiträge zur klinischen Chirurgie. 1904; 41(3): 723-733.
- 5) 著者の肩書にゲッテンゲン大学病理学教室(Pathologisches Institut der Universität, Göttingen)とある松岡の論文は以下の3編<sup>①, ②, ③</sup>で, 1904(明治37)年発行が2編<sup>①, ②</sup>, 1907(明治40)年発行が1編<sup>③</sup>である.
  - ① Über Gewebsveränderungen der künstlich erzeugten Kyphose der Schwarzwirbelsäule der Kaninchens. Archiv für Entwicklungs-mechanik der Organismen. 1904; 18(2): 253-260.
  - ② Beitrag zur Lehre von der fötalen Knochenkrankung. Deutsche Zeitschrift für Chirurgie. 1904; 72: 428-444.
  - ③ Die Regeneration des Knorpelgewebe. Virchows Archiv für pathologische Anatomie und Physiologie und für klinische Medizin. 1907; 175: 32-45.
- 6) 論文著者の肩書にヴェツブルグ大学病理学教室(Pathologisches Institut der Universität, Würzburg)とある松岡の論文は1905(明治38)年発表の1編<sup>①</sup>のみである. なお著書に紹介されているヴェルツブルグでのウサギ膝関節結核発症実験<sup>②</sup>については, 執筆時までにその論文を見出していない.
  - ① Über Gewebsveränderungen des verlagerten Hoden, Neben-hodens und Samenleiters. Virchows Archiv für pathologische Anatomie und Physiologie und für klinische Medizin. 1905; 180: 84-499.
  - ② 松岡道治著兼発行. 病理解剖. 骨及び関節ノ結核. 1910. p.29.
- 7) 整形外科の開始. 大阪毎日新聞. 明治39(1906)年6月24日, 3面, 1欄.
 

この記事は京都医事衛生誌(1906; 148: 30-31)にそのまま転載されている.
- 8) 当然明治38(1905)年のことである.
- 9) Wilson PD, Levine DB. Hospital for Special Surgery. A

brief review of its development and current position. Clinical Orthopaedics and Related Research. 2000; 374: 90-106.

10) Johan Anton von Mikulicz-Radecki (1850-1905)<sup>①, ②</sup>は1875年にウィーン大学を卒業5年後にBillrothの下で講師を務め, 1890年にプレスラウ大学外科学教授となり, 終生その地に留まった. 無腐性手術の創始者で生涯で232の論文を発表した<sup>①, ②</sup>. 松岡はミクリッツの下肢変形矯正の論文(187年, 1879年発表)を知り訪れたと天児は考えている<sup>③</sup>が, ミクリッツが日本人を懇切丁寧に指導したので当時日本人医師が多数留学していた<sup>④</sup>ことから, 松岡は先ずプレスラウへ赴いてミクリッツの教室に籍を置き, 併せて病理学教室で研究した<sup>④</sup>と考えられる.

- ① Olch PD. Johann von Mikulicz-Radecki. Annals of Surgery. 1960; 152: 923-926.
- ② Zajackowski T. Johan Anton von Mikulicz-Radecki (1850-1905) — pioneer of gastroscopy and modern surgery: his credit to urology. World Journal of Urology. 2008; 26(1): 75-86.
- ③ 天児民和. 松岡道治教授. 整形外科を育てた人達. 九州大学整形外科学教室同窓会. 1999. p.328-331.
- ④ 小田皓二. 明治の留学悲話(中) — 阪田快太郎の記録より一. 日本医事新報. 1993; 3588: 54-56.
- 11) 松岡道治. 胃癌ノ病理解剖ニ就テ. 日本外科学会雑誌. 1907; 8(1): 59-60.
- 12) 松岡道治. 人体を透視する方法. 小池信美編集兼発行. 叡山講演集. 大阪朝日新聞社. 1907. p.1-15.
- 13) この実験を述べた論文は執筆時までに見出していない.
- 14) 松岡道治. 吾人は天然の賜物を如何に応用すべきや. 注10. p.32-47.
- 15) 松岡の思い違いで実際は一昨年である<sup>⑧</sup>.
- 16) チューリンゲンの森(Thüringer Wald)では, 病人は終日森林開放の中を散歩し, 夜間は障壁のないテントの中で生活していると松岡は述べている<sup>⑭</sup>. 現在, この地方の多くの保養地が健康気候療法地(Heilklimat-ische Kurort)<sup>⑮</sup>に指定されている<sup>⑯</sup>.
  - ⑮ 宮地正典, 金山ひとみ, 鏡森定信. ドイツの気候医学と日本の森林セラピーへの活用. 大井玄, 宮崎良文, 平野秀樹編. 森林医学Ⅱ—環境と人間の健康医学—. 東京: 朝倉書店. 2009. p.44-60.
  - ⑯ Kurorte finden. <http://www.heilklima.de/index.shtml?kurorte> (平成22年5月11日参照)
- 17) 松岡道治. 理学的療法ノ応用. 京都医学雑誌. 1908; 5(1): 59-66.
- 18) Jonas Gustaf Wilhelm Zander (1835-1920)<sup>⑰, ⑱</sup>は, スウェーデン・ストックホルムの出身で, 1877年にウプサラ大学を卒業し, 1880年にはストックホルム医科大学に新設された体操治療科講師となった. 1862~85年にかけて四肢の逐次の筋抵抗運動用の器械を70種類以上考案した<sup>⑲</sup>. なお, Zanderの器械は現代の理学療法機器の原型になったと言われている<sup>⑲</sup>.



- ①天児民和. Gustav Jonas Wilhelm Zander. 注10③. p.318-320. ②Rang M. Jonas Zander (1835-1920), Stockholm. The Story of Orthopaedics. Philadelphia; W.B. Saunders Company. 1966. p.478-479.
- 19) Hermann Brehmer (1826-1889) は、1854年郷里シレジア(当時ドイツ領、現ポーランド)に初めて療養所(Dr. Brehmer'sche Heilanstalt in Görbersdorf)を建設し<sup>①,②</sup>、当時不治と言われていた肺結核に対して、高地での外気、運動、栄養による治療を行い、優れた治療成績を上げた(1882年までの958例中完治20%、死亡約5%)<sup>①</sup>。
- ① McCarthy OR. The key to the sanatoria. Journal of the Royal Society of Medicine. 2001; 94(8): 413-417. ② Kinghorn HM. Herman Brehmer. Transactions of American Climatological and Clinical Association. 1921; 37: 193-210.
- 20) 松岡道治. 療法. 注6②. p.65
- 21) Adolf Lorenz (1854-1946)<sup>①,②,③</sup>はウィーン大学において整形外科疾患、特に先天性股関節脱臼の保存的治療を確立した。
- ①天児民和. Adolf Lorenz. 注10③. p.59-63. ② Jackson RW, Pollo FE. The legacy of Professor Adolf Lorenz, the "bloodless surgeon of Vienna". Proceedings (Baylor University Medical Center). 2004; 17(1): 3-7. (<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC1200636/> 平成22年4月27日参照)
- 22) Albert Hoffa (1859-1908)<sup>①,②,③</sup>はヴェルツブルグ大学(1896年)、ついでベルリン大学教授(1902年)として、ドイツ整形外科の基礎を築いた。ドイツ初の整形外科学教科書を執筆し(1891年)、第1回ドイツ整形外科学会会長(1902年)を務めた。
- ①天児民和. Albert Hoffa. 注10③. p.36-41. ② Professor Dr. Albert Hoffa, University of Berlin (Obituary). British Medical Journal. 1908; 1(2454): 122. ③ Paul U. Das chirurgische Erbe. Albert Hoffa. Zentralblatt für Chirurgie 198 1; 106(13): 901-903.
- 23) Hermann Lossen (1843-1910)<sup>①</sup>はドイツ・ナッソウ(ラインラント＝プファルツ州)に生まれ、エジプト・アレキサンドリアのドイツ病院勤務などを経て、1898年にヘッセン州ダルムシュタットにDarmstädter Mechanotherapeutische Anstalt<sup>②</sup>を設立したが、1910年に46年の生涯を終えた。
- ① Krahn. Hermann Lossen. Archiv für Orthopädie, Mechanotherapie und Unfallchirurgie. 1911; 9: 218-221. ②次項のHeilanstaltと思われる。
- 24) Hermann Lossen. Ernst-Ludwigs-Heilanstalt. Beiträge zur Anwendung der Physikalischen Heilmethoden. Darmstadt: Verlag von G.L. Schlapp; 1905.
- 本書にはZanderの器械<sup>18)</sup>や自己考案の治療機器<sup>①</sup>を紹介しつつ、運動・訓練療法、マッサージ、温熱療法、電気療法、吸入療法、水治療法、災害後療法など実技を解説している。一部鉛筆による下線が松岡によって引かれていて、理学療法について松岡に大きな示唆を与えたものと思われる。
- ① Lossen. Über einige neue heilgymnastische Apparate. Archiv für Orthopädie, Mechanotherapie und Unfallchirurgie. 1904; 2: 51-57.
- 24a) マールブルヒ医科大学(Phillips-Universität Marburg)も訪れたという記述もある<sup>①</sup>。
- ①渡辺実. 松岡道治(第五編 明治後半期の留学, 第二部 明治後半中期(三四年~三八年)の留学, 第二十八章 内外留学生の増大, 第二節 明治三十五年度の留学). 近代日本海外留学生史 下巻. 東京: 講談社; 1978. p.885.
- 25) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績, 業績 第二報 松岡道治の学術論文. 日本医史学雑誌. 2006; 52: 361-393.
- 26) 整形外科学(第四 参観(一) 京都医科大学及医院). 京都医学雑誌. 1907; 4 (4. 附録 京都医学会第四次総会誌): 74-75.
- 27) 関節角度計, 鬱血帯<sup>①</sup>, 熱気浴装置<sup>②</sup>, 「骨錐, 脊柱側弯, 脊柱, 脳, 脊髓疾病ニ用フル」コルセット, ブラナ<sup>③</sup>など, 整形外科特有の診断・治療用器械が多数展示された。
- ①鬱血帯は、組織、器官を鬱血させ「身体ニ及ボス毒害作用ヲ烏有ニ帰セシメテ」<sup>④</sup>関節結核の疼痛、腫脹を軽減すると言うBier<sup>⑤</sup>の学説<sup>⑥</sup>に基づいて、当時広く用いられた。②松岡道治. 第四 局所熱気浴(局所温熱応用). 林春雄, 富士川游, 尼子四郎, 宮本叔編. 日本内科全書 二巻(治療総論) 温熱療法. 東京: 吐鳳堂; 1913. p.221-222. ③ゾラナ(Durana)とはdulalmin(ジュラルミン. アルミニウムと銅などの合金で1906年に発見された)のことで、フェルト、皮革、コルク、セルロイドなどと共に足底板の材料として用いられていて<sup>④</sup>、新素材であることから単に「ゾラナ」と呼ばれていたものと考えられる。
- 【④松岡道治. 療法. 注6②. p.89-90, 93-102. ⑤ Augustus Karl Gustav Bier (1861-1949)はキール大学でEsmarch教授の指導を受け、1907年から1932年までベルリン大学外科(Charité病院)の教授を務めた。⑥ Bier A. Passive Hyperämie der Glieder durch eine Staungsbinde. Hyperämie als Heilmittel. Leipzig: Verlag von F.C.W. Vogel; 1903. p.51-67. ④ Hovorka Ov. Der Platt-fuss. Archiv für orthopädische und Unfallchirurgie. 1906; 4(1-2): 120-140.】
- 28) これらの機器は結核性脊椎炎の免荷、変形阻止<sup>①</sup>や結核性股関節炎の免荷、拘縮矯正、固定<sup>②</sup>、先天性股関節脱臼の整復<sup>③</sup>に当時汎用されていて、その代表的な器械は当時のカタログ<sup>④</sup>に出ている。
- ①松岡道治著兼発行. 療法(脊椎ノ炎症性疾患

- 結核性脊椎炎及び椎骨関節炎). 人體畸形矯正学. 1910. p.128-129. ②松岡道治. 結核性股関節炎(下肢の畸形). 同上書. p.237-238. ③松岡道治. 先天性股関節脱臼(下肢ノ畸形). 同上書. p.199. ④堂阪武次郎編. 整形外科, 綱帯器械及装置. 医科器械目録 第2版. 京都: 堂阪器械店; 1913. p.84-88.
- 29) 山崎傳三は教室初の助手として2年間在籍した<sup>①</sup>. この時の教室公開では, 他科では教授, 助教授が任命されている「説明委員」に山崎は任命され<sup>②</sup>, 教室の展示品の説明に当たった.
- ①廣谷速人. 第5報 松岡教授の教室員と受け入れ内地留学生. 日本医史学雑誌. 2010; 56(3): 351-366.
- ②医学会総会委員役割(第一 開会記事 附庶務, 会計報告). 注26. p.1.
- 30) 義布斯隊の一兵卒(漫録 医学会評判記). 京都医事衛生誌. 1907; 159: 42-43.
- 31) 電(漫録 藪陰蚊声). 同上誌. 1907; 161: 33-35.
- 32) 拙稿第一報<sup>1)</sup>において, 整形外科教室は明治41(1908)年に建設されたと述べたが, 明治40(1907)5月の時点ですでに完成していたものと判断できる<sup>31,32)</sup>ので, ここに訂正する.
- 33) 京都帝国大学記念会(雑報). 京都医事衛生誌. 1911; 205: 22.
- 34) 整形外科教室X光線室<sup>①</sup>に設置されたエックス線装置は, 外科学教室創設に際して, 猪子止戈之助外科学教授(医院長)が当時ドイツ留学中の平井毓太郎小児科学助教授<sup>②</sup>に依頼して輸入し, 京大附属医院開院直前の明治32(1899)年4月に外科学教室に備えられたが, 整形外科講座新設に伴って同講座へ移管されたと言う<sup>③</sup>.
- この装置は, 大正末期に京大整形外科教室に勤務していた瀬木嘉一<sup>④</sup>が使用した経験があると記している<sup>⑤</sup>ので, 設置以来長く使用されたものと思われる.
- しかし平井毓太郎の「略歴および年譜」<sup>⑥</sup>のなかに, 本装置は本邦では第三番目に輸入された装置であったが, 極めて初期の器械であったのでその性能は低かったとの記述がある.
- ①整形外科X放射線室(京都大学百年史編集委員会. 第三章 戦前期の京都帝国大学 キャンパス・設備の整備). 京都大学百年史 写真集. 京都大学後援会; 1997. p.36. ②平井毓太郎(慶応元 [1865]一昭和20 [1945]年)は明治22(1889)年帝国大学医科大学を卒業, 明治27(1894)年に京都府医学校教諭, 府療病院第二内科部長に任ぜられた. 明治32(1899)年, 京都医科大学小児科学講座開設のため欧州へ留学し, 留学中の明治33(1900)年に京都帝国大学助教授に任ぜられ, 明治35(1902)年11月に帰朝, 翌月小児科学講座教授に昇任した.
- ③京都帝国大学編集兼発行. 一〇 外科学教室(第二編 学部及研究所 第二章 医学部 第三節 學術). 京都帝国大学史. 1943. p.349-354. ④瀬木嘉

一<sup>⑥</sup>,<sup>⑦</sup>(明治24 [1891]年一昭和49 [1974]年)は, 大正4(1915)年に愛知医学専門学校(現・名古屋大学医学部)を卒業, 順天堂医院(現・順天堂大学医学部附属順天堂医院)レントゲン科(科長 藤浪剛一), 東京帝国大学附属伝染病研究所を経て, 大正11(1922)年から2年間京大整形外科教室伊藤弘教授の下でレントゲン室主任を務め, 傍ら大学病理学教室(藤浪鑑教授)で研究に従事した. 学位取得後, 京都市神田区福田町(現・東京都千代田区岩本町一丁目)で全国初のレントゲン科標榜医院を開業した. ⑤瀬木嘉一. 23 日本での診療レントゲン装置設備(一八九八年). 科学の使徒・レントゲン. 東京; Xレイ・ジャーナル. 1971. p.62-66. ⑥平井和三編集兼発行. 同33年4月【初期のレントゲン】. (略歴および年譜). 藍より出でて藍より青し 平井毓太郎とその門下達. 1999. p.80.

【②志賀達雄, 山下久雄, 増沢田武弘編. 瀬木嘉一博士の略歴, 成楽齋一瀬木嘉一先生 思い出の文集. 東京: 瀬木百合; 1984. 「まえがき」の前頁. ⑤廣谷速人. 京大整形外科伊藤弘教授の門下生たち. 醫譚. 2009; 88(通巻105): 5552(86)-5570(104).】

- 35) 林喜作(明治14 [1881]年一昭和46 [1971])<sup>30)①</sup>は, 明治49(1907)年に京都帝国大学医科大学を卒業して整形外科教室へ入局, 助手を経て明治45(1912)年に教室初の講師を委嘱された.
- 36) 脊柱・股関節矯正器など数多くの器械が展示されたようであるが, とくにグリュンフェルド氏伸展包帯装置については, 「本器ハ京都医科大学整形外科教室ニ於テ専ラ賞用サレツ・アリ」として京都の医療器械店のカタログ<sup>28)④</sup>に掲載されている.
- 37) 上記カタログ<sup>28)④</sup>には電動式の脳手術器械は記載されていないが, 頭蓋骨用の電動式螺旋状骨鋸(spiral saw)や穿孔器(trephine)は19世紀末にはすでに報告がある<sup>①</sup>ので, ここで言う「電気モートル」は, 特別に輸入されたものであろう.

①Cryer MH. The surgical engine and its use in bone surgery. Journal of American Medical Association. 1897; 29(14): 677-679.

- 38) 骨を折る器械, すなわち骨砕き術(osteoclasis)に使用する器械(osteoclast)は, くる病による下肢変形矯正のために古くから種々開発されてきた<sup>①</sup>. 松岡は自著に「ローレンツ氏ノ矯正折骨器」として「螺旋装置ト牽引帯ノ介助ヲ以テ漸次ニ矯正ヲ営ムモノナリ」と紹介しているところから<sup>②</sup>, 当時の教室に備えられていた装置は, 楔状のクッション(Keilpolster. 幅15 cm, 高さ7-8 cmの砂囊あるいは木製.)<sup>③,④,⑤</sup>ではなく, より複雑な器械(Redressionsinstrument. 図2)<sup>⑥,⑦</sup>であったと考えられる.

本器の特徴として, 折骨の位置, 方向が正確に決

められ，操作に力があまり要らず，さらに加わる力を制御して骨膜下骨折だけを起こし，軟部組織の損傷が少ないことなどが挙げられている<sup>7)</sup>。なお1895(明治28)年の時点で，その価額は50ドルであったと言う<sup>7)</sup>。

① C.B. Keetley. Osteoclasia. *Annals of Surgery*. 1887; 5(1): 40-47. ②松岡道治. 機械的矯正術(曲足，療法). 注29①. p.273-276. ③Lorenz. Figs. 1-3. Heilung des Klumpfußes durch das modellirende Redressement. *Wiener Klinik: Vorträge aus der gesammten praktischen Heilkunde*. 1895; 11. u. 12: 299-302. ④Rüttimann R, Böni T. Krumme und kurze Beine. *Historische Rückblick. Orthopädie*. 2000; 29: 750-756. ⑤Peltier L.E. Hand molding (Congenital deformities). *Orthopedics. A History and Iconography*. San Francisco: Norman Publishing; 1993. p. 53. ⑥Lorenz. Figs. 14-17. 注38③. p. 323-326. ⑦The Lorenz Osteoclast. *Transactions of the American Orthopedic Association*. 1895; 7: 297-303.

39) 関節，ことに膝関節の関節包内に酸素を注入することによって，関節の拘縮を軽減させ，あるいは関節包の病変を描出する Sauerstoff-Einblungsapparat (酸素吹き込み器) は，Hoffa<sup>24)</sup> の助手 Wollenberg が Dräger 社 (Lübeck) の協力を得て作成した<sup>①, ②</sup>。わが国への酸素溶接切断器 (ポンプ) の輸入は明治42 (1909) 年からであって<sup>③</sup>，過マンガン酸カリと過酸化水素との化学反応によって生じた酸素を一定の圧で関節内へ注入するための医療用装置はかなり大掛かりな装置であった<sup>③</sup>。なお，上記医科器械カタログ<sup>29④)</sup>にはこの器械の記述はない。

①Gust. Albert Wollenberg. Apparate zur Einblasung chemisch reinen Sauerstoffes in das Körpergewebe und in Körperhöhlen. *Medizinische Klinik. Wochenschrift für praktische Ärzte*. 1906; 2(20): 521-522. ②Hoffa A. Ueber Röntgenbilder nach Sauerstoffeinblasung in des Kniegelenk. *Berliner klinische Wochenschrift*. 1906; 43(28): 940-945. ③日本酸素株式会社編兼発行. 設立の動機(第1章 創業期一合資会社の発足 第1節 日本酸素合資会社の設立) *日本酸素五十年史*. 1966. p. 1-2.

40) 松岡道治. 晩近ニ於ケル結核性股関節炎療法ノ改善. *日新医学*. 1911; 1(2): 107-126. および山谷徳次郎編. *最新結核病論*. 日新医学社. 1915. p. 511-530.

41) グリュンフェルド氏股関節展伸器は，すでに明治40年5月の京都医学学会第4回総会の参観時に展示されていた<sup>27)</sup>ので，松岡の名を冠したこの器械がどのように改良されたかはこの論文<sup>40)</sup>に述べられていない。

42) 伊藤弘，天児民和，伊藤鉄夫. 京大整形外科の昔を聞く. *整形外科*. 1976; 11: 83-91.

43) 医科東西番付. *医海時報*. 1909; 759: 62.

この番付には木村(中濱)東一郎，木村(高木)兼

寛らが行司，不知火(大森)治豊，北の里柴五郎(北里柴三郎)，三宅灘秀藏人(三宅秀)，鴨の川四朗(宇野朗)らが取締，揚場山況翁藏(石黒忠恵)，団子坂(森)林太郎，加賀美山次(青山胤通)，窪山(山根)正次，比叡山(荒木)寅三郎らが勝負監査役と，当時の錚々たる医学者，大学教授の名前が並んでいる。

44) 田代教授の醜名は，田代教授経営の田代病院の所在地下谷練堀町と教授の体格にちなんだ命名と考えられる(私信. 坂口亮肢体不自由児協会会長，高取吉雄東大助教授[現・教授]，平成16年2月12日). 松岡教授の「松の岡」は陳腐であるが，強いて言えば，大学や自宅(京都市上京区吉田町[現・左京区吉田中大路町]に近い神楽岡(吉田山)に聳える孤高の松を想像したものと言えよう。なおのちに京都帝国大学福岡医科大学(九州帝国大学医科大学)整形外科学教授になった住田正雄(当時外科学助教授)は留学中であった<sup>①)</sup>ので，番付末尾に「墨田川」として載せられたのであろう。

①小林晶<sup>②)</sup>によれば，住田の留学期間は明治41(1908)年9月から同45(1912)年6月であった。

【②小林晶. 九州における近代整形外科の祖，住田正雄(一八七八—一九四六)の生涯. *日本医学史雑誌*. 1999; 45: 563-583.】

45) 越山散人. 京都帝国大学京都医科大学教授 従六位 医学博士 松岡道治君. *関西杏林名家集 第一輯*. 大阪: 衛生新聞社. 1909.

46) 近藤次繁(慶応元(1865)年—昭和19(1944)年)<sup>①)</sup>は，明治24(1891)年帝国大学卒業後，欧州へ3年余私費留学，明治33(1900)年東京大学助教授，翌年教授(外科学第二講座)に任ぜられた。大正14(1925)年に退官して駿河台病院を設立，院長を務めた。

松岡が近藤教授と対比されるのは，近藤が「短軀黎顔，鬚髯こく生ひて」いて「音吐透徹してキビキビしたる態度」で，「孜孜として勉めて怠らず，刻々として学で倦まざるの精力の士」<sup>②)</sup>であったことによるものと思われる。

①井関九郎編. 近藤次繁，田代義徳. 批判研究博士人物 医科編. 世田谷町(東京府); 発展社出版部. 1925. p. 199-200. ②鈍牛. ふじつくば(十五) 佐藤と近藤. *医海時報*. 1913; 989: 1062.

47) 鈍牛. ふじつくば(八) 田代と松岡. 同上誌. 1913; 977: 535.

48) 青風白雨楼主人. 医学博士 松岡道治. 今のお医者. 1913. p. 108-110.

49) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績，業績 第二報 松岡道治の学術論文. *日本医学史雑誌*. 2006; 52(3): 361-394.

50) Walter Quiring は，Allgemeine Krankenhaus St. Georg, Hamburg (以下AKSGHと略す)の放射線診断科在籍医師名簿(私信. AKSGH放射線診断科部長Dr. H. Vogel. 平成16年7月20日)によれば，1882(明治

- 15) 年ドイツ・エルベ州サンダウに生まれ、1905 (明治38) 年1月に医師開業免許取得、同年5月に学位を授与されて同科へ就職した。翌年同科助手となり、1910 (明治40) 年11月に退職した。従ってかれは退職後東洋を旅行したことになる。
- 51) Quiring. Medizinisches aus dem fernen Osten. Fortschritte auf dem Gebiete der Röntgenstrahlen. 1911; 17: 235-241.
- 52) Albers-Schönberg 式圧迫遮光板 (Kompressionsblende. 圧搾遮光器, 圧迫円筒撮影器)<sup>①</sup>とは、内部に鉛板を張った筒状の装置で、エックス線管球に取り付けてエックス線束の散乱を防ぎ、さらに体表を圧迫して撮影対象までの距離を短縮する装置である<sup>②,③</sup>。
- ① Albers-Schönberg. Eine Kompressionsblende zum Nachweis von Nierensteinen. Fortschritte auf dem Gebiete der Röntgenstrahlen. 1901-1902; 5: 301-308.
- ② 館野之男. 散乱線の除去 (第3部 X線診断学の発達 第14章 X線写真法の発展). 放射線医学史. 東京: 岩波書店; 1933. p. 115-118. ③ 加藤芳郎, 青柳泰司, 林周二, 遠藤俊夫. 2.3.1.i. 遮光円筒 (Cylinder diagram) (第2章 X線管および附属品. 2.3. 附属品). 日本放射線技術学会技術史編纂委員会編. 日本放射線技術史. 京都: 日本放射線技術学会; 1989. p. 130-131.
- 53) トロコスコープ (Trochoskop)<sup>①</sup>とは、診察台の下に可動式の管球を備えたエックス線撮影台で、水平の体位で透視でき、骨折整復、ギプス固定に有用とされた。この装置は本書第1版 (1903 発行) には記載されていない。
- ① Albers-Schönberg. 21. Kapitel. Das Trochoskop und seine Technik (Spezielle Technik). Die Röntgentechnik. Lehrbuch für Ärzte und Studierende. 2. Auflage. Hamburg: Lucas Gräfe & Sillem. 1906. p. 341-352.
- 54) Wehnelt 断続器 (Unterbrecher) とは 1899 年 Wehnelt<sup>①</sup>が発表した電流断続器<sup>②</sup>で、希硫酸液中に鉛の陰極と先端に小さい白金を付した銅の陽極を置き直流電流を通じると、白金電極に水素の泡が形成されて電流が止まり、泡が消えるとまた電流が流れると言う現象が繰り返され、高電圧を発生させることが出来た<sup>③,④</sup>、エックス線発生に有用である<sup>④</sup>。
- ① Wehnelt, Arthur Rudolph [Berthold] (1871-1944). (Waq-Zz.) Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Band 25. Mannheim/Wien/Zürich. Biographisches Institut. 1979. p. 110. ② Wehnelt. A. Ein elektolytischer Stromunterbrecher. Elektrotech-nische Zeitschrift. 1899; 20: 76-78. ③ 松岡道治. ウェーリルト氏液体電流遮断器ノ説明及其応用. 医事新聞. 1902; 581: 26-29. ④ 館野之男. § 高電圧発生装置 (第2部 放射線源の多様化, 第7章 X線管とその附属装置). 放射線医学史. 東京: 岩波書店. 1973. p. 58-60.
- 55) 副手<sup>①</sup>、介補<sup>②</sup>と考えられる。通常副手は大学卒業生、介補は官公立学校卒業生が専修生<sup>③</sup>を経て志願し、附属医院へ期限付きで採用される。規則上、副手は有給もしくは無給となっていたが、事実上すべて無給であった。
- ① 京都帝国大学編集兼発行. 第五 副手規定 (第十四章 医科大学). 京都帝国大学一覧 従明治三十二年 至明治三十三年; 1900. p. 66-67. ② 京都帝国大学編集兼発行. 第五 附属医院医員介補介補採用内規 (第九章 京都医科大学). 京都帝国大学一覧 従明治三十三年 至明治三十四年. 1901. p. 209. ③ 京都帝国大学編集兼発行. 第六 専修生細則 (第十五章 医科大学). 同上誌. p. 96-98.
- 56) 松岡道治. 千人以上治療シタル畸形患者ニ就テ. 注 26. p. 30-32.
- 57) 松岡道治. 人體畸形矯正学ノ一小史. 注 28 ①. p. 1-5.
- 58) 松岡道治. 脊椎「カリエス」. 第三回日本医学会雑誌. 1911; 508-514.
- 59) 林喜作. 進行性化骨性筋炎 (石人) ノX線写真供覧. 日本外科学会雑誌. 1914; 15(1): 191-193.
- 石人とは、進行性骨化性線維異形成症 fibrodysplasia ossificans progressiva の最終臨床像である<sup>①</sup>。
- ① Baysal T, Elmali N, Kutlu R, Baysal O. The stone man: myositis (fibrodysplasia) ossificans progressive. European Radiology. 1998; 8: 479-481.
- 60) 東京帝国大学医科大学整形外科学教室は、明治39年4月の勅令によって創立され、5月に田代義徳第二外科学助教授が整形外科学講座教授に任命されたが、診療を開始したのは同年10月11日であった<sup>①</sup>。
- ① 東京大学医学部整形外科学教室編集兼発行. 第1章 通史 東大整形外科学教室百年史. 2008. p. 3.
- 61) Hiromoto B. Statistik der angeborenen Missbildung. Archiv für Orthopädie, Mechanothérapie und Unfallchirurgie. 1913; 12: 219-232.
- 著者 Hiromoto B., すなわち廣本文吉は、大正3 (1914) 年以降廣藤文造と名乗っている<sup>①</sup>。かれは明治14 (1881) 年呉市に生まれ<sup>②</sup>、明治39 (1906) 年10月岡山医学専門学校を卒業して<sup>③</sup>広島県病院<sup>④</sup>へ3年間務めたのち東大整形外科で3年勤務した<sup>④,⑤</sup>。大正元 (1912) 年に広島市で父業を継いで開業した<sup>②</sup>が、昭和20 (1945) 年8月6日原子爆弾の犠牲になった<sup>⑥,⑦</sup>。
- ① 岡山医学専門学校編輯兼発行. 明治卅九年十月医科卒業生 (卒業生). 岡山医学専門学校一覧 大正三年. 1914. p. 152. ② 阪田泰正著兼発行. 廣藤文造 (呉市). 広島県の医師群像一明治時代一. 1986. p. 115. ③ 職員録 (乙) (明治四十年). 広島病院 医員 (広島県). 印刷局; 1907. p. 419. ④ 本田六介. 廣藤文造 (広島県 広島市). 日本医籍録. 東京: 医事時論社. 1928. p. 9. ⑤ 東京大学医学部整形外科学教室編集兼発行. 広本文吉. 注 60 ①. p. 9. ⑥ 今川卓治, 藤堂直樹編輯. 原爆被災者物故会員名簿. 広島市医師会史 第1篇. 広島市医師会.

- 1956, p.95. ⑦広島市医師会史編纂委員会編集. 四一四表 原爆殉職者名簿 (第1節 原子爆弾投下直後の医療活動 2 医療従事者の被害). 広島市医師会史 第2篇. 広島市医師会. 1980, p.285-291.
- 62) 明治41 (1908) 年12月31日における東京・京都両市の現住人口は, 前者2,186,079人, 後者442,462人<sup>①</sup>で, おおよそ5対1の比であった.
- ①人口内閣統計局編纂兼発行. 第四表 市町村本籍人口, 現住人口及現住戸数並現住戸ローニ付人口. 日本帝国人口静態統計 (明治四十一年十二月三十一日調). 1911, p.16-23.
- 63) 松岡道治. 佝僂病ニ就テ. 日本外科学会雑誌. 1907; 8(1): 31-32.
- 64) 松岡道治. 佝僂病ニ就テ. 同上誌. 1907; 8(3): 137-140.
- 65) 小川三之助<sup>①</sup>は, 明治31 (1898) 年に中央医学会<sup>②</sup>で報告した症例 (7歳, 女兒)<sup>③</sup>に1例 (生後2年5ヵ月, 女兒)を加えた2例を翌年の第1回日本外科学会で報告した<sup>④</sup>. 小川は先の報告<sup>③</sup>のなかで「若シ山間僻地ニ之レヲ索メハ幾多ノ患者アルモ知ララス只苦艱ナキヲ為メニ医治ヲ乞フニ至ラサルト兩親無頓着トシテ生来畸形トシテ放擲スルト僻村ノ医士正當ノ診断ヲ下ス能タハサル等ニ由リ吾人ノ之レヲ驗スル稀レナルノミ」とし, 「近ク二三年以来ノ内国諸雑誌ヲ索ルニ一モ之レニ関スル記述ナシ」としても, 患者が多数存在する可能性を示唆した. なおこの報告<sup>③</sup>は本邦初の報告とされている<sup>⑤</sup>.
- ①小川三之助は文久元 (1861) 年生まれで, 明治19 (1886) 年に帝国大学医学科を卒業し<sup>⑥</sup>, 埼玉県病院長<sup>⑦</sup>を経て, 明治28 (1895) 年5月から愛知医学校 (のち愛知県立医学専門学校) 教諭として外科学, 皮膚科学, 繃帯学を講じ, 愛知県立病院外科第二部部长に任ぜられた<sup>⑧</sup>. 大正4 [1915] 年5月に病氣静養のため辞任, 帰郷 (千葉県君津郡根形村飯富 [現・袖ヶ浦市飯富]) し, 翌年10月死去した<sup>⑨</sup>. ②中央医学会とは, 明治27 (1894) 年に発足した愛知医学会<sup>⑩</sup>が, 明治30 (1897) 年に名称を変えた医学会である<sup>⑪</sup>. それぞれ愛知医学会雑誌, 中央医学会雑誌を発行した. ③小川三之助. 左膀関節先天性脱臼一例 (九月々次常会デモンストラチオン). 中央医学会雑誌. 1898; 26・27: 14-16<sup>⑫</sup>. ④小川三之助. 先天性膀関節脱臼二例. 日本外科学会誌. 1899; 1(1): 77-82. ⑤植家毅. 先天股脱臼との出会い. そして今日まで. 第44回日本小児股関節研究会編集兼発行. 先天股脱 温故知新一脱臼屋と呼ばれた時代一. 2005, p.21-25.
- 【⑩小関恒雄. 明治中期東京大学医学部卒業生動静一覽. 醫譚. 2000; 76: 1-21. ⑪沼野武照編輯兼発行. 埼玉県職員録 明治19年10月改正. 1886; 194. ⑫青井東平編. 小川三之助. 旧職員一覽表 (愛知医学校, 愛知県立医学専門学校). 名古屋大学医学部九十年史. 名古屋大学校友会第五十二回学友大会. 1961, p.504-505. ⑬小川三之助氏 (人事). 中央医学会雑誌. 1916; 128・129: 70-71. ⑭愛知医学会設立之旨意 (本会記事). 愛知医学会雑誌. 1894; 1: 44-45. ⑮評議員会記要 (本会記事). 中央医学会雑誌. 1897; 17: 52-54. ⑯第四十八回常会 (明治31 [1898] 年9月) 概説. 第一席 (本会記事). 同上誌. 1898; 26・27: 53.】
- 66) 松山為雄. 討論. 注65④. p.83.
- 松山為雄は明治3 (1870) 年福井県敦賀市に生まれ, 明治22 (1889) 年第四高等学校医学部 (現・金沢大学医学部) を卒業<sup>①</sup>, 京都府療病院助手として外科を専攻した<sup>②</sup>. 猪子止戈之助教諭京大転勤のあとを継いで明治32 (1899) 年から京都府医学校教諭 (府療病院外科部長) を務めたが, 明治35 (1902) 年に退職して市内で開業した<sup>③</sup>.
- ①卒業生 医学部 医科 明治27年7月卒業. 第四高等学校一覽 自明治三十年 至明治三十一年. 1898, p.121-122. (なおこの年まで山上姓であった)
- ②衛生新聞社編集兼発行. 松山為雄君. 関西杏林名家集 第1集. 1909.
- 67) 田代義徳. 先天性股関節脱臼. 日本外科学会雑誌. 1907; 8 (1) : 36-37.
- 68) 田代義徳. 先天性股関節脱臼. 医海時報. 1907; 671: 507.
- 69) 松岡道治. 先天性股関節脱臼. 日本外科学会雑誌. 1907; 8 (1) : 37.
- 70) 松岡道治. 先天性股関節脱臼. 同上誌. 1908; 8(5): 281-283.
- 71) 松岡道治. 先天性股関節脱臼ニ就テ (第21回日本小児科学会京都地方会, 明治39年12月15日). 児科雑誌. 1907; 81: 141.
- 72) 松岡道治. 先天性股関節脱臼ニ就テ (学報). 京都医事衛生誌. 1907; 156: 3.
- 73) 松岡道治. 先天性股関節脱臼ニ就テ (第32回京都医学会. 明治40年2月16日). 京都医学雑誌. 1907; 4(2): 105-106 (会報: 31-32).
- 74) 松岡道治. 先天性股関節脱臼整復及包帯法供覧 (日本小児科学会第13回総会演説 其一. 明治41年11月22日). 京都医事衛生誌. 1908; 177: 27-28. および児科雑誌. 1909; 106: 31-38.
- 松岡のこの「演説」のあとの「討論」<sup>①</sup>で東大教授弘田長会長<sup>②</sup>は, 「ドウモ田代君ノ御話デハ松岡君ハ非常ニ材料ヲ多ク有ツテ居ラレテ, 自分ハタイヘン材料ガ少イ」と述べて, 松岡の“手術” (脱臼整復固定処置) に謝意を表している.
- ①弘田長. 討論. 児科雑誌. 1909; 106: 38-39. ②弘田長 (安政6 [1859] 年一昭和3 [1928] 年) は, 土佐国幡多郡郡下田村 (現・高知県四万十市下田) の出身で, 藩の貢進生に選ばれて上京, 明治13 (1880) 年に東京大学を卒業, 翌年熊本県立医学校

教諭、同16(1883)年同校校長に任ぜられた。明治18(1885)年ドイツへ留学、同22(1889)年に東京大学小児科学教授に任ぜられた。大正11(1922)年に退官し名誉教授となった<sup>4)</sup>。

【@野村章恒。日本小児科の鼻祖 弘田長先生の人間像。日本医事新報。1974; 2604: 63-66.】

- 75) 松岡道治。先天性股関節脱臼一百一例ニ就テ(雑報 京都医科大学の研究事項)。京都医事衛生誌。1909; 184: 48.

このドイツ語論文は本稿脱稿時までに見出していない。

- 76) Hayashi K, Matsuoka M. Angeborene Mißbildung kombinierter mit kongenitalen Hüftverrenkung. Zeitschrift für orthopädische Chirurgie. 1913; 31(3 u. 4): 369-399.

- 77) 林喜作。Klinische und röntgenologische Untersuchungen von 233 Fällen der angeborenen Hüftverrenkung mit 658 Abbildungen。(大正[1914]12月2日付。京大 学位旧制/医/414。) (林喜作。先天性股関節脱臼患者二百三十三例ノ臨床的並ニX線的研究(彙報 学事及宗教 学位授与)。官報。大正4(1915)年1月28日; 745: 538-539。および医学中央雑誌。1916; 13(228): 1446-1448)。

- 78) 田代義徳。第22回日本外科学会総会。第45席演説に対する「追加」。日本外科学会雑誌。1921; 22: 111.

先天性股関節脱臼患者の大腿骨骨頭標本は松岡の著書<sup>1)</sup>の「第一図」に示されているものであると考える。第12回日本外科学会総会で松岡が改めて報告<sup>2)</sup>しているの、その講演後田代が大腿骨骨頭のギブス模型を松岡に依頼したと考えられる。

①松岡道治著兼発行。第一図 畸形ヲ呈セル大腿骨上部。先天性股関節脱臼及び其跛行療法。1913.

②松岡道治。先天性股関節脱臼ノ解剖標本供覧。日本外科学会雑誌。1911; 1911; 12(1): 149-150.

- 79) 田代義徳。小児整形外科ニ就テ(患者及「レントゲン」写真供覧)(日本小児科学会東京地方会第19回集会。明治40年7月)。児科雑誌。1907; 86: 540.

本演題の抄録<sup>1)</sup>によれば、田代はこの集会で3例の患者を供覧した。なお田代らの調査によれば、東大

整形外科創設前の外科学二教室(左藤外科[1901[明治34]年~1905[明治38]年]と近藤外科[1899[明治32]~1905[明治38]年])の外來患者統計<sup>2), 3)</sup>で、総外來患者36,387人中畸形(整形外科)患者は1,200人、うち先天性股関節脱臼は24人に過ぎなかった。また「自分ノ「プリワート」ノ「ポリクリニック」三万幾人ヲ見タ中ニハ殆ド一人モナイ」と田代は本症がまれであることを強調し、「私ハマダ多数ノ経験ガナイ<sup>4)</sup>カラ、書物ニアル所ヲ標準トシテヤッテオロマスノデ」ト告白している。

①田代義徳。第一先天性股関節脱臼患者、第二「リットル」氏病「デモンストラチオン」患者供覧。医事新聞。1907; 747: 1785-1806。および児科雑誌。1907; 90: 777-809。②宇野博士還暦祝賀会編。Kikuchi S, Tashiro Y. Zur Statistik der Deformatäten。宇野博士還暦祝賀論文集。宇野博士還暦祝賀会。1910. p. 13-25。③田代義徳、菊地正之。畸形ノ統計。東京医事新誌。1911; 1698: 1-11。④この地方会が開催された明治40(1907)年7月と言え、教室開講<sup>6)</sup>の明治39(1906)年10月から僅か9カ月を経たに過ぎない時期である。

- 80) Matsuoka M. Atlas der angeborenen Verrenkung des Hüftgelenks. Archiv und Atlas der normalen und pathologischen Anatomie (Fort-schritte auf dem Gebiete der Röntgenstrahlen. Ergänzungsband 24.). Hamburg; Luca Gräfe & Sillem: 1911.

- 81) 松岡道治。骨及ビ関節ノ結核ニ就テ。日本外科学会雑誌。1907; 8(1): 36.

- 82) 松岡道治。結核性脊椎炎ノ一標本供覧及ビX光線ニ際スル注意。同上誌。1909; 10(1): 33.

- 83) 松岡道治。骨及関節諸疾患ノX線病理。同上誌。1911; 12(1): 48.

- 84) 松岡道治。骨及ビ関節ノ結核。同上誌。1907; 8(5): 271-273.

- 85) 松岡道治。結核性脊椎炎ノ一標本供覧及ビX線応用ニ際スル注意。同上誌。1909; 10(1): 102-104.

- 86) Matsuoka M. Berichte über 700 Fälle von Spondylitis tuberculosa. 同上誌。11(3): 1-13.

# Dr. Michiharu Matsuoka, Founder of the Department of Orthopaedic Surgery, Kyoto University, and His Achievements

(Part 6: Studying Abroad of Dr. Matsuoka and Opening to Public,  
Reputation and Achievement of the Department)

Hayato HIROTANI

Kyoto City

Dr. Michiharu Matsuoka studied orthopaedic surgery in Germany, Austria and other countries during the period from August, 1902 to May, 1906. He visited many university pathological institutes and surgical and orthopaedic clinics to study pathology and to learn the practice of orthopaedic surgery. After that, he started his practice at the newly established Department of Orthopaedic Surgery in the Medical School of Kyoto Imperial University in June, 1906. The department was opened in 1907 and in 1911 it was opened to all citizens and practical doctors in Kyoto City and exhibited many orthopaedic specimens and instruments. In particular, the x-ray apparatus of the Department was so well equipped that a German radiologist who visited the Department admired it in his article that was published in the journal of radiology in 1911. The Department was not surpassed by others for the number of patients with the dislocation of the hip and tuberculous spondylitis as well as the advanced quality and variety of roentgenological and pathological researches on these diseases.

**Key words:** History of orthopaedic surgery, Michiharu Matsuoka, X-ray apparatus,  
congenital dislocation of the hip, tuberculous spondylitis